

小説同人誌評 42

今回は『てくる』 『八月の群れ』 『星座盤』

細見和之

記録すくめの暑さの夏がようやく終わつたと思つたら、すでにカレンダーは10月に突入し、ガザからの奇襲作戦とそれにはたいするイスラエルの過剰なまでの報復攻撃から一年を迎えた。すでにガザの死者の数はその何倍にもなると言われている。『現代詩手帖』五月号ではパレスチナ詩のアンソロジーが組まれていた。そこには、あのイスラエルの報復攻撃がはじまったさなかに書かれた詩もふくまれている。いまは、ノーベル平和賞が「被団協（日本原水爆被害者団体協議会）」に贈られたというニュースが飛び込んできたところだ。

さて、今回は三〇冊ほどの雑誌が届いている。このところ若干増加しているようだ。新しく創刊されたものもあるが、これまで届いていなかったものもあるようだ。そんななかで、一冊の雑誌としての充実ぶりという点では、『てくる』、『八月の群れ』、『星座盤』

に今回は目を引かれた。

『てくる』は今回第34号が届いている。同誌の巻頭に掲載されている、塩崎勝彦「閉ざされた風景」は、認知症がはじまっている七五歳の福田庄治の生きている世界を、福田の内面から四百字詰め換算五五枚程度で描いている（以下、「四百字詰め換算」の言葉は略）。

作品のなかで特別の出来事が起こるわけではないが、記憶の欠損をつうじて日々の風景が歪んでゆくその感覚が、じつにリアルに捉えられているようなのだ。福田は不安に追いつめられるわけではなく、どこかひょうひょうとさえしていて、それでいて彼の風景は閉ざされてゆくのである。ちょうど福田と同様の状態の私の知人があって、その内面世界が浮かび上がってくるようだった。

同誌掲載の、海野あかり「みどりの揺りかご」も五五枚ほどの作品だが、こちらは「みどり」という名前の中学生である「私」の視点で、中学一年のときの母親の死から歌劇団員を育成する高校を受験するまでの約三年間を描いている。

母親の死後「私」は東京から父の実家である札幌市定山溪（じょうざんけい）の伯父のもとに引越す。作品をつうじて、名前の「みどり」とその由来である定山溪の「みどり」がゆたかに重なり、祖母である「グラマン」の姿とともに生きいきと描かれている。

同誌掲載の、小林忍「あんた極楽、わしや地獄」は五〇枚あまりで、百一歳を迎えるにいたった母親の介護に追われてきた、「私」の姿を描いている。

「私」は現在七四歳で、一〇年以上母親の介護を続けてきた。母親が九〇歳を過ぎてても老人ホームへの入居は順番待ちで、疲労困憊の日々。その「私」に対して「闇の声」が行政への怒りをぶちまけたら、叱咤激励したり、内省を促したりする。介護に疲れた自分をもうひとりの自分が客観的に見つめているのだが、そういう「闇の声」を持っているがどうかで介護の状況はずいぶん変わるに違いない。

『八月の群れ』は第78号が届いている。巻頭の松良子「揺れる」は、阪神・淡路大震災の直後の小学校の様子を、当時の記録をもとに、教員の千代子の視点で日録ふう物語化した六五枚ほどの作品。

小学校の校舎自体は無事だったが、内部には物が散乱している。そのうえ、小学校が近隣住民の避難所となったため、千代子らは文字どおり不眠不休の対応を迫られたのだった。間もなく三〇年前の出来事となってしまうが、一つの小学校を舞台に震災下の人々の姿が貴重なかたちで掘り起こされている。

同誌掲載の、大森康宏「彼岸花」は、五〇枚あまりの作品だが、こちらでは八二歳の大江伸介が五歳下の妻、里子の介護をしている。

一年前に里子は脳梗塞で倒れ、いまは自宅
で寝たきりの状態である。里子は流産したこ
とはあるが、二人に子どもはなく、天涯孤獨
の身。「お願い、殺して」と繰り返す里子を前
に、伸介は心中を決意し、身辺整理をして遺
書を認める。伸介は最後のお粥を作り、そこ
に強い睡眠薬ハルシオンを混入させ、里子に
食べさせる……。どこかで物語が反転するの
かと思いきや、作品は結末に向かつて一気に進
む。先に紹介した小林作品の「闇の声」がま
ったく響くことのない世界。この方向で作品
を書き切った作者にも、私は敬意のようなも
のを覚えてしまう。

同誌掲載の、葉山ほづみ「旅の終わりの魔
法使い」は、一転してファンタジックな「魔
法族」の世界を五五枚あまりの作品で描いて
いる。

主人公の凜子は大学四年。彼女は、就職の
決まっていた会社から不意に内定取り消しの
連絡を受ける。意気消沈した凜子は、アパ
ートの大家の春子から、就職先を紹介される。
春子に連れられていった先は、高齢の魔法族
の人々が暮らす施設だった……。こんな荒唐無
稽な物語をてきぱきと描き、場面をつぎつぎ
と展開してゆく作者の力量に、大いに感心さ
せられた。

『星座盤』は今回、第18号。巻頭に掲載の、
真名波田キリ「確かにここにいた僕は」は、

七〇枚あまりの作品で、三〇歳の「僕」と二
七歳の「あかり」という名前の女性との心の
交流を描いている。

「僕」は病気がちの母親と暮してきたが、
とうとう母親が心臓発作で亡くなってしま
う。「僕」はコンビニの仕事をはじめますが、不器
用で職場でも疎まれる。あるとき「僕」は万
引きする女性を目撃する。その女性が「あか
り」だった。そこから互いの過去を打ち明け
あうような関係になってゆくが、恋愛という
よりも人生の同志的關係。いかにも線の細そ
うな「僕」が次第に「あかり」を守るような
強さを帯びてゆく。

同誌掲載の、あまざき葉「るり子の発酵」
は、五五枚近くの作品で、自家製パンを作っ
ている「るり子」が主人公。

るり子は四五歳。パン工房で働きながら、
自分で自家製パンを通信販売したり、地域
の手づくり市で出店したりしている。しかし、
いささかお人好しのところがあって、パン工
房の同僚に出し抜かれたり、恋人にも身勝手
な振る舞いをされたりする。そういう「るり
子」の姿が、全篇をとおして傷みやすいパン
種と重ねられている。文章も滑らかで、パン
種の発酵過程の丁寧な描写が活きている。

同誌掲載の、松林杏「スタンドパートナー」
は、一二〇枚あまりの作品で、オーケストラ
における人間模様を優れた筆致で描いている。

「私」は二四歳でオーケストラにヴァイオ
リン奏者として就職して一九年。突然、ピア
ニシモの演奏で弓が震えるという病気のよう
なものに襲われる。ひとりて弾いているとき
には起こらないが、オーケストラで演奏して
いると震えだすのだ。イメージ・トレーニン
グをしても、かえって練習と本番で震えがや
つて来る。

タイトルにある「スタンドパートナー」は
二人一組で一つの譜面台を見る際の合い方の
ことである。「私」の普段のスタンドパートナ
ーは高辻という謎めいた年長者。他のメンバ
ーは高辻を訝しく思っているのだが、「私」
にとっては不思議と信頼できるパートナーだ。
しかしその高辻が本番の途中、突然バツハや
イザイの無伴奏パルティータや無伴奏ソナタ
を弾き始める。高辻はそのままオーケストラ
に辞表を提出する。

オーケストラで他のメンバーと合わせて演
奏することからくるストレスなのか、高辻の
振る舞いの本当の意味は分からない。しかし、
音楽を言葉で表現するという難しい力技が全
篇に渡つてのびのびと展開されていて、すが
すがしい作品である。

今回ここまで三つの同人誌から作品を紹介
してきたが、もちろん他の雑誌にも優れた作
品が掲載されている。

その代表は『淡路島文学』第20号掲載の、

深山孝「あんた」。百枚を超える作品で、海に生きる人々の姿を雄渾に描いている。

千葉県出身の田村慎一は妻を亡くし、さらに母を亡くしたとき警察官の仕事を止め、富山湾の漁村で仕事をはじめ。父親が漁師だった田村は、ふと見た漁師募集のポスターに心を動かされたのだ。四七歳にしてささか強引な形で漁師の仕事をはじめた田村だったが、真摯な仕事ぶりで漁師仲間からの信頼を得てゆく。ある嵐の夜、漁業組合の組合長の船が帰還しない。その救出に向かう船に田村は果敢に乗り込む。とくに後半の、嵐の海での船の救出の場面が出色である。まさしく第20号記念号にふさわしい力作だ。

『半月 すおうおおしま』第10号＋4号掲載の、瀬戸みゆう「トンネルの向こう」も七〇枚あまりの、これに匹敵する力作。

周防大島から神戸の病院へ持病の定期検査に出かけた「わたし」の帰りという、いかにも作者の日常をそのままに描いた作品としてはじまりながら、岩国駅で新幹線を下り、愛車のマークIIを運転するあたりから、異界の気配がただよいはじめる。マークIIは帰り慣れた道を外れ、得たいの知れないトンネルに入る。そのトンネルは誰かの太陽のようにピンク色に輝いている。さらにトンネルの向こうにはキンキラキンに輝く不思議な街が浮かび上がってくる…。

作中、文学教室で「異世界」について「わたし」が学んだという話も繰りこまれているのだが、その学びを地味にいく物語だ。

『文宴』第141号掲載の、藤原伸久「真昼の星―暖かな闇 第二部」も、一二〇枚あまりの力作。前作の後篇で、あわせると二五〇枚ぐらになるだろうか。

この後篇には、新たな人物として高市源治という謎めいた老人、その高市と知り合いのめし屋の女将とその娘などが登場する。高市は優れた医師だったが、彼には看護師の医療ミスで誹謗中傷にさらされた過去があったのだった。

ただし、この高市をめぐる物語が作品の全体とどう関わるか、難しいところがある。それと前篇以来の、光山と「オバハン」こと中岡アヤのあいだにながったのか、光山の片思いがたんに破綻を導いたのか、読者としてはもう一歩知りたくなる。

とはいえ、この作品が前篇と後篇合わせて私がかこ数年に渡って読んできた作者の作品のなかで、質量ともにもっとも充実したものであることは疑いなく思う。

『野火』は第40号が届いている。同誌掲載の、神尾与志広「喉首」は、管理地の土地の賃貸や売買も手がけている建設会社を舞台にして、弓削という社員の視点で描いた、八〇枚の物語。

冒頭、弓削は同僚の堅田とともに、遊休地の草刈りに精を出している。彼らのもう一つの大きな仕事は、土地の売買交渉である。とくに複数の所有者が関わっている土地の場合、やっかいなことになる。今回、社運を賭けた土地の買い取りを二人は命じられるが、その大きな土地のまんなかには、決して手放そうとしない男の所有地が「喉首」のように居すわっているのだった…。

二人の勤めている建設会社の本社が私の暮らしている丹波篠山市にあるという設定で、普段私が馴染んでいる地域や地名がこの作品には頻りに登場する。その点に刺激されたところがなかつたと言えば嘘になるが、土地売買に関わる複雑な事情が緻密に書かれているところにも惹かれた。

同誌掲載の、清水裕明「祈るしかない、と私は言う」は、一〇枚あまりの短篇でありながら、深い読後感を与える。

「私」は仕事のストレスからか、耳鳴りを抱えるようになって、それに悩まされている。その度合いは「私」の生涯を耳鳴り以前と以降に分かつほどに大きい。「私」は夜、川べりで石を投げたことから、若者たちの集団に殴られる。一方、若者たちは二つの集団に分かれて殴り合いをはじめ、ナイフが持ち出され、血の臭いがただよふことになる。

これは「私」個人の物語には尽きない、暴

力に満ちた世界の状況そのものを寓意した作品とも読めるのだった。

『雑記噺子』第29号では、九〇枚あまりで綴られた、有瀬尚憲「入吉・球磨川開拓団物語」を印象深く読んだ。

開拓団の一員として満州に渡った、作者の実の伯父、有瀬治の一家の史実に基づく物語。国の無謀な政策と関東軍の撤退によって翻弄されるなか、さまざまな大人たちの対応もさることながら、とくに子どもたちの年齢差による受けとめの違いが丁寧に描かれている。なかでも幼い弘子が事態の本質をその都度本能的に感知している姿が鮮やかだ。その弘子も亡くなり、有瀬治の一家では弘子の姉、和子だけが満州人の妻となることで生き延びたとされている。その和子のその後も気になるところだ。

『白鴉』第34号には、美月麻希「静寂の毒」が掲載されていて、一・二六枚の作品（これは目次記載の数字だが、私の計算では一五〇枚近い）。

冒頭、コロナ禍の通勤風景のなかで、「わたし」は「真鍋さん」の言葉を思い起し、さらに四〇年前に農業の研究所で働いていた一年間のことを振り返る。そのとき、二十代後半から三十代半ばの研究員からなる職場に「わたし」は若い研究員として採用されたのだった。

男性中心主義的なその研究所で、男性研究員である「真鍋さん」は、男性用トイレの掃除が女性研究員に任されていることを問い直したり、「わたし」を誘って川べりで自家製のコーヒーを飲ませてくれたりする。しかし、「真鍋さん」をつうじて「わたし」が研究所にも馴染んでいったとき、研究員が病気で亡くなるという事態が続く。どうやら農業の開発の際に、発癌物質を体内に取り込んでしまったようだ。やがて「真鍋さん」もまたステージ4の肺癌でホスピスに入院することになる…。

「わたし」は農業、医薬品の開発そのものに批判的なわけではないようだ。むしろ、そのなかで失われていった人たちの記憶が埋もれてゆくことが耐え難いのだ。その意味ではタイトルの「静寂の毒」とは、発癌物質というよりも残された者たちの沈黙のことなのだ。全篇をつうじて農業開発に関わる専門用語が頻出するが、作者自身の体験と知識に裏づけられた確かなものと感ぜられる。

『組香』第9号に掲載の、安見二郎「穴」は、五〇枚弱のよくまとまった短篇に仕上がっている。

小児科医である「私」が亡くなった友人の著名な精神科医、更貝誠のことを振り返るという設定。更貝は名声を博した精神科医でありながら、地球外生物（宇宙人）との接触を

語る人々を精神病とするのではなく、事実の体験と捉え返す著書を発表して、学界から厳しい批判を浴びる。あまつさえ、更貝に打ち明けた体験を嘘だったと主張する女性までが登場して、更貝が窮地に陥ったと思えるとき、更貝は交通事故で亡くなってしまふ…。

全篇に渡ってきびきびとした文章が冴えている。作者は雑誌のプロフィール欄で「コロナ三部作の完結」と記しているが、コロナ禍から地球外生物とのコンタクトにまでいたった作者の想像力を讃えたいと思う。

同誌掲載の、鶴川澄弘「さいはてビーチ」も五〇枚弱の短篇。こちらはさわやかな仕上がりになっている。

五〇代半ばの「僕」は、小笠原諸島父島の二見港にたどり着き、ホステルの同客のなかに「五百歳」という名前の女性を見かける。「いおろい」と読むその珍しい名字には見覚えがあった。大学四年のときの北海道旅行で同じ名字の女性と出会ったことがあったのだ。小笠原の女性は七歳下の妹だったことが分かるのだが、その妹「フミちゃん」は、姉は自分が運転していた車の起こした交通事故で死んでしまったと告げる。姉は海外を含めいろんな島を訪れていて、小笠原にも来たがっていたが、実現できないまま亡くなったのだ。一方「僕」はいわゆる筋金入りの乗り鉄というのだろうか、日本のすべての鉄道を乗り果

たしたあと、退職して小笠原に来ている身なのである。

「フミちゃん」の旅の背景に深刻なものがあるとはいえ、小笠原諸島の風景のなかでゆったりと展開する、二人の交流が味わい深い。

『札幌文学』第94号掲載の、海邦智子「奏でのとき」は、風来坊のようなひとりの男の姿を四〇枚弱の作品で描いている。

喫茶店と駄菓子屋を母とともに営んでいる「私」のところに、一昔前のフォークシンガーのような男がギターを抱えて訪れる。春のことだった。「タクジ」と名乗るその男は、駄菓子屋にやって来た子どもたちの前でフォークソングを弾き語りして、「タクさん」「タクちゃん」と人気を博すが、夏の訪れとともに姿を消す。

夏の終わりに母親が亡くなり、駄菓子屋も店仕舞いをせざるを得なくなるが、その三ヵ月後の夜、男がよれよれの体で戻って来る。二人で駄菓子屋を再開し、一年目を迎えた冬、男は体調を崩してしまう……。

作中で「タクさん」が歌う、吉田拓郎の「今日までそして明日から」が切なく響く。

『たまゆら』第127号では、河崎洋充「異聞・阪急淡路の笛吹き男」にまず惹かれた。四枚に満たない掌篇だが、見事な散文詩のような趣がある。同作者の他の二篇も優れているが、風刺の強さという点ではこの一篇になるだろう。

う。

同誌掲載の、佐々木国広「秘婚」は、年齢の離れた夫婦の独特の愛の姿を、五〇枚強の作品で描いている。

主人公、苗村義博は三冊の詩集を刊行しながらも、思うような文学活動ができず、定年退職を機に、同人誌『パルス』に入会する。そこで出会った若い女性、市田燈子に強く惹かれ、相手の親の大反対を押し切って結婚するにいたる。派手な披露宴などできない関係なので「秘婚式」と称したものを知り合いの宮司のいる神社で行う。

結婚に際して燈子は自分に鬱病があることを打ち明けていたが、結婚の五年後、燈子の様子が怪しくなつてゆく。義博にお金を盗んだという疑いをかけたり、部屋が盗聴されていると叫んだりするようになる。それから、燈子の病状と付き合ひながらの義博の日々が過ぎてゆく。タイトルの「秘婚」とは、たんに一回限りの儀式のことではなく、二人の生活の姿そのものを指しているのだ。

『VIKING』第881号掲載の、山根麻耶「あの子のこと」は、大学の同級生に振り回される「私」の姿を一二五枚ほどの作品でひたすら描いている。

大学三年の「私」こと「澄華」には「莉々亜」という同級生がいる。入学して間もないときからの知人だが、「澄華、私、死にたく

なっちゃった」というメッセージをスマートフォンに送ってきたりしては、実際に大量の睡眠薬を飲んで瀕死の状態に陥ったりする。しかし、退院してしばらくするとけろつとして姿を見せて、同様の振る舞いを繰り返すのだった。「私」は勝手に死んだらという言葉を飲み込んで、むしろそういう言葉が頭を掠めたことに後ろめたさを感じて抱く。

作品には莉々亜と澄華の両方を懸念にサポートする教員が何名も登場するが、私自身の職場でもよくある光景である。対処療法では意味がなく、抜本的な解決を目指したいのだが、打つ手がなく、こまねいている。この作品自体どこに向かつてゆくのかわからないが、安直な解決策など容易に見あたらないのが事実なのだ。

最後に、『せせ』第126号掲載の、螢冨空「7N—セブンナイン—」は、いささか陰鬱な七〇枚ほどの近未来小説。

感染すると爪に雪のような結晶を生じる「Snow Crystal」という奇病が発生している、発症すると激烈な痛みで感染者は死に至る。

その発症確率をHorizonというAIが診断し、その確率が99・999999%の者がセブンナイン「7N」と呼ばれているのだった。感染者はただちに施設に隔離され、監視のもとに置かれる。そんな時代における生と死の葛藤が巧みに描かれている。